

ONE LOVE 通信 35号

2007年9月30日発行

前号のワンラブ通信発送作業の日、激しい腰痛に襲われ、急遽病院に駆け込んだ私。年齢を無視して走りまわったのが悪かったのか…。日本のみんなに心配をかけつつ、杖をつきながらルワンダへ戻った。びっくりしたのは一足先に帰ったガテラ。しかし仕事の山を前に、腰痛も吹っ飛んでしまった!! さあ、これからは重たいものは若い衆に持たせて、私は楽をするぞ!



【ルワンダーブルンジ東奔西走】

7月に日本からルワンダに戻り、ほっとする間もなくブルンジへ。前号で知らせたとおり、ブルンジで義肢製作所を開くためである。飛行機で飛べば、わずか30分。でも飛行機代がもったいないし、運ばなくてはいけない荷物もたくさんあるので、車で出発。久しぶりの陸路での国境越え。不思議なのは、国境を越えてしまうと、同じような景色がなぜか違って見えてしまうこと。道中、串焼きの肉を買ったり、景色を楽しみながら、夕方には首都ブジュンブラへ。

ルワンダの時もそうだったが、まずやることは書類の手続き。NGOの承認は得られたので、今は政府とパートナーシップを結ぶ交渉中。同時に障害者に対する聞き取り調査。前日にアナウンスをしたにもかかわらず、たくさんの障害者が集まった。ほとんどの人は義足も装具も身につけていない。杖を持っている人もごく少数だ。松葉杖を使って歩いている男性の手のひらにはごっついタコができています。

聞けばブルンジでも義足を作っている場所はあるという。しかしほとんど機能しておらず、どうも開店休業のようだ。ただ一人義足を履いている男性の足を見せてもらったら、肝心の義足を支えるためのベルトがなく、手でおさえながら歩いている。これでは義足の意味がない。集まった障害者を前に、今後の方針を伝えるガテラ。ルワンダで活動を続けて感じたのは、NGOは政府の協力なしには進めていくことができないということ。単純に義足を作っていくことはできる。でもその活動を政府に伝えないことには、いつまでたっても障害者の問題は理解してもらえない。と言うことは、NGOがいくら活動を続けていても、その存在を知られず、政府からの協力を受けることができない。現在ワンラブの活動は人々の善意から成り立っている。でもいつまでも第三者の寄付をもらい続けることは難しい。だから実際にその問題を抱えている政府からの協力が必要となってくる。自分たちをアピールすることの大切さを、ルワンダでいやと言うほど教わった。



障害者自身にブルンジの福祉を扱っている省庁に足を運ばせ、問題を訴えさせる、そして私たちは実力を見てもらうために、何人かの義肢装具を製作する。そういう方針に決定した。ブルンジでの活動の場所は、町からもさほど遠くない一軒家。ここを事務所と義肢製作所プラス住居として改造した。

さらに日本で研修をした義肢装具士エマーブルとパトリックをキガリから呼び寄せ、早速 10 人の障害者の型取り作業。一人は明日商売でドバイに行くので、



手に出来た大きなマメ

早くやってくれと言うおじさん。あまりの体格の良さに、二人がかりで型を取る。その他、ポリオで両足が不自由な学生、お母さんに連れてこら

れ た女の子、一本足で畑を耕しているというおじいさんは、膝をついて作業をするため、その膝が石のように硬くなっている。

型も取り終り、一通りの事務作業も終え、一行はルワンダへ戻る。ブルンジにはまだ十分な資機材が揃っていないため、主な製作はルワンダで行う。言ってみれば、これは国境を越えた巡回診療のような感じ。いずれ少しずつ機械や道具をそろえるにしても、今はしばらくこの形をとることになりそう。

ルワンダで一気に義足を作り、10 日後にはまたブルンジへ仮合わせに戻る。初めての義足を履いたおじさんは緊張した面持ち。その点、子供はすぐに慣れひよこひよこ歩いている。義肢装具士たちに作業を任せ、ガテラと私は政府との交渉。こちらはなかなか思った



型を取る、エマーブルとパトリック

ように進んでいかない…。

仮合わせが終わると、またルワンダ、そして義足をきれいに仕上げてブルンジへ。まったくもって忙しい毎日である。

この号が出ている頃には、正式な義肢製作所の開所式が終わっている頃である。その時に

は、義足を履いた障害者たちが元気に政府の人の前に姿を現すことだろう。果たしてブルンジでのデビュー

は如何に？

さてそのブルンジはルワンダと同じような問題を抱えている。植民地時代に民族を分けられ、今もなお対立が続いている。ルワンダの場合、虐殺は 59 年から続いていたものの、94 年に一気に全土に広がり大量の死者が出たため、世界が注目し、援助などが大々的に行なわれ現在の発展につながってきているが、ブルンジの場合、ルワンダと同じ頃に虐殺が始まったにも関わらず、どれもが小規模のため、メディアに取り上げられにくく、それ故世界からの支援も遅れている。

実際に私たちがブジュンブラ（首都）郊外の食堂で夕方涼んでいたある日も、空を砲弾が飛び交っていた。次の日のニュースでは、政府の要人の家が狙われ、焼き払われてしまったと伝えていた。

人々はそんな中でも生活をしていかなくてははいけない。しかしブルンジの人は、そんなニュースを聞くこと



集まった人に説明するガテラ

にも慣れてしまったような気配さえある。

集まった障害者に話を聞いてみると、切断した人の多くは地雷による被害のようだった。せつかくあるのに機能していない義肢製作所。障害者たちは口々に不満を述べていた。これからがワンラブの腕の見せ所である。

ガテラは若い頃、ブルンジで生活をしていた。ルワンダの民族差別が激しかったため、ブルンジに避難していたという。だから知り合いも非常に多い。この両国は元は一つの国で、兄弟のような国。ほぼ同じ言葉を話す。ガテラはそこでの生活を知っているから、同じように障害を持つ人たちのことを無視できないのかもしれない。ワンラブがどこまで彼らの力になれるかわからないけれど、また新たな挑戦として、ブルンジでも進んでいきたいと思う。

日本でワンラブを支援してくださっている皆さま、ルワンダの隣の国ブルンジの障害者たちが自分たちの足で歩いていくためには、皆さまのご協力が必要です。

よろしくお願い致します。

【アビリンピックに向けて】

前号でお伝えしたように、11月14日から18日まで、静岡で障害者の技能を競い合うアビリンピックが開催されます。これは世界的な大会なのですが、私たちもその存在を今年になって知りました。その話を聞いて、2000年のパラリンピックの思い出が蘇ってきたのは言うまでもない。ルワンダの障害者に世界を知ってほしい。アビリンピックも絶好のチャンスである。

義肢製作の種目もあったのですが、現在私たちがルワンダで使っている材料と日本で使っている材料が違うため、練習もなしに突然日本の材料を使って競技に参加することは不可能と判断し、代わりに注目したのは、ルワンダで頑張っている女性たち。いろいろなことが原因で自立しなくてはいけない女性がたくさんいます。その中には障害を負った女性もいます。彼女たちは組織を作り、ルワンダの手工芸品を作って販売しています。たくさんの種目がある中、私たちが選んだのは「刺繍」。彼女たちが作っている手工芸の中にも素敵なデザインのものがたくさんあります。

参加をするのはポリオで両足が不自由な恰幅の良いお母さん。私が工房を訪ねた時も笑顔で迎えてくれました。緊張をしていたのか、思ったよりも無口。その時は日本に持っていくポストカードを探しに行ったのですが、たくさんあってどれにしようか迷ってしまいました。しかもきちんと並べられていないので、デザインがあちこちに混ざってしまっている。不自由な足と重たい体を折り曲げて、奥の方に隠れてしまっているカードを引っ張り出してきてくれた。



ルワンダ事務所代表ガテラより

白いひげの意味するものは？

ガテラが考えていること

ルワンダで義足を作り始めて、あっという間に10年が経ってしまった。気がつけば自分のひげの中にも白いものが混じっている。

大虐殺後、ルワンダはとても速いスピードで発展を遂げている。他のどの国を見ても、ルワンダのようなスピードで民族の和解と発展を遂げている国はない。それは自分たちの誇りである。

紛争のため国に帰ることができなかったから、ずっと帰りたいと思い続けてきた。国に戻ったら役に立つことをしたいと思った。私は小さい頃から障害を持っていたので、ベルギーから来たカトリックの神父さんが開いた障害者の施設で育ってきた。その神父さんはいつも言っていた。『私がしてきたことを、私に感謝する必要はない。困っている人がいたら、その人のためにその気持ちを使いなさい』と。そして今、その時が来ていると思っている。

ルワンダの国外には出たことがないという。飛行機に乗ることも不安があるよう。まだ実感がないのか、アビリンピックの話をして他の世界のこのように話を聞いている。アビリンピックには何カ国が参加することになるのかな？彼女は参加する人たちの中から友達を作ることができるかしら？たくさんのことを得てルワンダに戻ってほしい。そして日本の良い所を見ていってほしい。

そこで皆さんにお願いです。ワンラブでは彼女の参加のための費用を集めています。ぜひご協力ください

～・～具体的に彼女の参加にかかる費用は～・～

航空券(キガリ―東京往復):約25万円

宿泊費:約10万円

移動費:約10万円

滞在費や来日にかかる費用など:約12万円

合計:57万円

彼女が日本にやってくる時、彼女の工房で作っている手工芸も一緒に持ってきて、アビリンピックの期間中展示をしようと思っています。もちろんそれらは販売を目的として。収入は彼女の組織とワンラブへ。次のステップにつながるように。

その工房で作られている手工芸は素晴らしいものがありますが、ルワンダ国内で販売されているため、良さが世界に広がっていません。ぜひ日本の人たちにその作品を見てもらって、これからの彼女たちの収入につながってほしいと思います。

アビリンピックは静岡で開催。作品の展示も静岡で行う予定です。現在場所を探し中。場所と開催期間が決まったら、すぐにHPに載せますので、皆さんチェックしてください。皆さまのご協力をお願いいたします。

97年に活動を始めてから今日まで、およそ5000人の人に義足や装具・杖などを渡すことができた。物乞いばかりしていた障害者たちが、何とか生きようとしている姿を見ることは私の喜びにもつながる。でももちろん喜びの中には、悲しみもある。どんなに自分たちが頑張っても、自立をしようしない障害者がいることも確かである。でも私たちはこれからも彼らの自立を目指して、共に歩んでいこうと思う。

ここまで来るにはたくさんの人たちの支援があった。一度も会ったことがないのに、陰からワンラブを支えてくれている人たち。本当にありがとう。

これから10年、20年と経ち、ルワンダはどのように変わっていくのか？そしてその時、自分たちはどう変わっているのか？たった一つ願うことは、この先ルワンダが、そして世界が平和であるように。私たちがワンラブブランドに植えた木のように、まっすぐと上に向かってのびていきたい。

そんなことを考えていると、みんなに支えられながら生きてきた10年が無駄ではなく、年をとることが決していやではないと、鏡に映る自分の白くなってきたひげを見て思うのである。

今号の患者さん

ワンラブ通信を通して、患者さんの紹介をします。今月は懐かしい 97 年に来た第一号の患者さんです。

彼の名前はフェリックス。セメント工場で運転手として働いていました。しかし配達途中、運悪く地雷を踏んでしまい、両足を切断。最初から難しい義足の製作です。97 年の開所当時はまだ十分な材料がありません。でも最初の患者さんとして、義肢装具士たち（当時私を含め 3 名）は張り切っています。合成樹脂を使った義足を作ることに決定しました。でも途中、ケニアで買ってきた樹脂が固まらず、作業が停滞。何しろ初患者なので、少なくとも私の頭の中はまるっきり応用が利かない。パニック状態である。キガリの街中を探し回り、やっと材料を見つけた！三人寄れば文殊の知恵。何とか工夫をし、義足を仕上げる。フェリックスは足をなくして、もう数年が経っているらしい。立ち上がるという感覚を忘れてしまっているという。さあ、履いてみて。そう、そんな調子。立ち上がろうとする。でも重心の掛け方を思い出せず、倒れてしまう。心配そうに見守るお父さん。でも手を貸してはいけません。何度か転びながら、立ち上がる。立ち上がった時には、久しぶりの目線の高い姿勢に目まいがしたそうだ。そして歩く練習。ズボンのベルトを持ってもらい、一步一步、歩き始める。歯をくいし

ばって。義足を履いて初めて歩いた時は、何か一つのことを成し遂げたような気がすると思ってくれた。

初めて親方の手を借りず、自分たちで作った義足を履いて歩いているフェリックスの姿を見ながら、思わず体が熱くなった。嬉しい、でもこれはスタートに過ぎない。嬉しさの半面、履いた義足がボキッと折れてしまったらどうしようという不安。どちらかと言うと、不安の方が多かったと記憶する。



フェリックスと真美

この最初の義足を作った様子は、テレビのドキュメンタリーでも紹介された。その頃の映像を見ると、若かったガテラと私がいる。

その後、フェリックスは練習を重ね、杖をついて歩けるようになった。そして何年かのち、杖なしで歩いているフェリックスの姿を街で見かけた。あの時私にいろいろなことを教えてくれたフェリックスは、きっと今頃素敵なお父さんになっていることに違いない。



ディアネ in Japan

ワンラブの義肢装具士、ディアネが神奈川県海外技術研修員として来日しました。日本での様子をお伝えします。

8月15日に来日したディアネ。初めての飛行機、初めての海外（隣国以外）とあって、本人も、見送る側も、待つ側も、無事に日本に着けるのが一番気がかりでした。特に、ナイロビでは一泊して日本のビザを取らなければならず、治安の良くないナイロビで、ディアネが一人で大丈夫かみんな心配。親心から「現金はブラジャーの中に隠しなさい」と伝え、そんなこと出来ないと拒まれたとか・・・。到着したディアネに聞くと、「とっても長い旅だった。でも、何事もなかったわ。ナイロビではよく寝られたわよ」という答え。たくましいです。



県庁訪問にて、神奈川県知事と（ディアネ前列右）

今回の研修先は、16年度のセザールと17年度のエマーブレがお世話になった、平井義肢製作所。工場長と初めてお会いした時には、「ルワンダで、セザールやエマーブレから、ちゃんと教わってきたか？」との質問に、「はい」と答える彼女。この研修に出会うまで、ルワンダのスタッフが日本で勉強できるなんて、誰も思っていませんでした。それが、日本で研修を終えた二人が、ルワンダで指導したディアネが来日できるなんて！本当に、夢のような話です。

日本の食べ物についても、色々教わってきているよう。すぐ出来るヌードル（カップラーメンの事）ナマの魚（刺身の事）などなど。特に刺身はルワンダで航空券を受け取りに行った際、アジアの人が生魚を食べているテレビを見て絶句…。（ルワンダでは生魚を食べる習慣はない）とにかく色んなものに挑戦してみてね。

9月まで日本語の特訓を受け、10月からいよいよ義肢装具の勉強に入ります。

ルワンダスタイルで登場、歓迎会にて



森上さん in ルワンダ



みなさん、はじめまして！

4月から、キガリのワンラブでやっかいになっている森上です。いい歳したおじさんですよー。

さて、ぼくと一緒にちょっと散歩に出かけませんか。

まずは、ワンラブから出て大きな道づたいに歩いてみます。うへえ、たくさん車ですねえ。ほとんどが日本車ですね。あ、バスも走ってますよ。ほら、商業用のバンを改造した車です。何人乗ってるんでしょう。1, 2, 3…、げげっ、なんと運転手入れて19人ですよ。

向こうから小学生や中学生がやってきました。

「ボンジュール！」「ボンジュール！」

みんな元気にあいさつしてくれます。おっと、ハイタッチも出たか。あちゃあ、それ以上フランス語で話しかけられてもね、あとは「メルシー」ぐらいしか知らないんだよね、ごめんね。

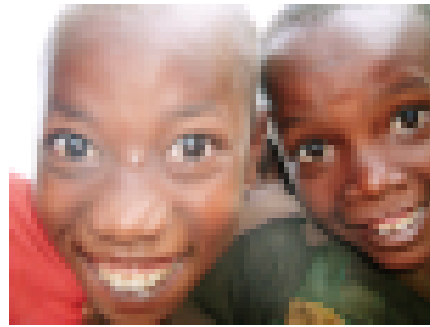
坂が多いので、排気ガスがひどいのが難点です。でこぼこ道の方にそれてみましょう。下町(?)です。わあ、2, 3歳ぐらいのこどもたちがたくさん出てきましたよ。「なんて言ってるか」って? 「ウムズング」って言ってます(複数だと、アバズングになります)。白

人というような意味でしょうか。そういえば、ぼくが小学生ぐらいの頃も、外国人を見かけると「外人だ、外人だ!」と騒いでいましたっけ。でも、明らかにぼくたちに向かって言ってますよね。ほら、手を振ってますよ。こっちに向かって走ってきましたよ。あらら、転んじゃった。おーっとと、溝に落ちちゃったよ。それでもまだ、「ウムズング」って言ってるよ、強いね。

息をするのが惜しいくらい、ウムズングウムズングと連呼してますね。念仏みたい。近づいてきましたよ。あら、1mのところで止まっちゃったりして。恥ずかしがり屋なんだね。おお、あなたは元気がいいな、いきなり

しがみついて来ちゃって。カーわいー。はいはい、握手歓迎ですよー。はい、君もね。

「ウムズング!」カチン。大人に言われるとちょっとカチンと来るなあ。いや、



親しみを持ってくれてるんだよ。

「ニーハオ!」カチン!! いかんいかん、こういふときも笑顔で「こんにちは」と答えてあげましょう。じゃあね、バイバイ。あの子たち、見えなくなるまで、ウムズングって叫んでますよ。

一緒に楽しい散歩をありがとうございました。では。



紹介します! ワンラブのスタッフ

ワンラブにはたくさんのスタッフがいます。

義足を作っているスタッフはもちろん、それ以外にもワンラブ内で働いているルワンダの人たち。施設を維持していくために、これらのスタッフを欠かすことはできません。皆さまからの支援は、彼らの生活を支えるために使われています。

これらのスタッフの中で、一目おかれている存在。それはゲストハウスのお掃除や物品を管理しているママジャンティ。年齢は62才。子どもが9人います。そのうちの4人は自分の子供ではありません。ルワンダの虐殺で家族を失った子供たちを引き取って、女手一つであるにも関わらず、立派に育てています。今年になって実の息子さんの一人が結婚式を挙げました。ワンラブのボランティアスタッフ二人も、ルワンダの民族衣装を着て参加しました。

虐殺のあった94年当時、彼女はルワンダにいました。危険にさらされながらも、生き延びる事のできた存在です。

彼女がなぜ、一目おかれているか? それは彼女の厳しさ。年配の女性ならではの厳しさで、スタッフの仕事ぶりを監視しています。間違いがあった時は、必ずきちんと報告をしてくれます。ルワンダで10年間活動を続けているけれど、私が未だに頭を悩ませていることがある。それはスタッフが何かを壊してしまった時、あるいは何か間違いをし

てしまった時、みんながきちんと報告をしてくれないということ。一言〇〇を壊してしまった、ごめんなさいと言ってくれれば済むことなのに、それを言ってくれないからいつも私は頭にきてしまう。でもママジャンティは必ずそれを言ってくれる。彼女と話をしていると、時々息子さんの話になる。息子さんのしつけも厳しかったようだ。息子さんは一時ワンラブで働いていた。最初はスコップを持って肉体労働。そしてレストランで。とても素直に育っていて、好青年だった。そんな息子さんが自慢のようである。息子さんの話をしている時のママジャンティは、どこか誇らしげだ。

ママジャンティは時々体の不調を訴える。そろそろリタイアを考えているらしい。でもママジャンティ、お願いだからもう少し、私たちと一緒にいてください。まだまだ頼りにしたいことがたくさんあるのだから。



右がママジャンティ
息子さんと夫婦と一緒に



日本事務所より

【書き損じハガキありがとうございます！】

前回のワンラブ通信で、書き損じハガキ、未使用切手、未使用テレホンカードを募集したところ、たくさんの方がご協力下さいました。ありがとうございました。合計すると、約20万円分にもなりました。正直なところ、こんなに集まるとは、思っていなかったもので、嬉しい悲鳴。「一つ一つの力が集まると、大きな力になる」と実感しました。



たくさん集まりました！

お家の中を探してくださった方、お友達に声をかけて下さった方、コレクションをわけてくださった方、本当にありがとうございます。

そして、今回の通信発送には早速、沢山集まった切手を使わせて頂きました。一つ一つ貼りながら、「こんなに沢山の絵柄の切手があるなんて」、「自分が生まれる前に発行された切手だっ！」と大騒ぎ。みなさんもワンラブ通信の切手を、楽しんでくださいね。

7月1日～8月31日までに届いたもの

書き損じハガキ 864枚
切手 96,294円分
テレホンカード 134枚

合計 約193,624円分

ワンラブでは、これからも引き続き、書き損じハガキ、未使用切手、未使用テレホンカードを募集しています。送り先は、下記の茅ヶ崎事務所まで、よろしくお願い致します！！

※ 使用済み切手、使用済みテレホンカードは現在集めておりません。ご注意ください。

【お話をさせて頂く場所を探しています】

10月にガテラ・真美が帰国します。そこで、ワンラブの活動を多くの人に知ってもらうため、活動について話をさせていただける場所を探しています。学校の授業や団体の集まりなどに、講師として呼んでください。スライドなどを使って、ルワンダやワンラブのことをお話しさせていただきます。ぜひルワンダからの生の声を聞いてください。詳細は下記、茅ヶ崎事務所までお問い合わせください。

【日本でのイベント参加のお知らせ】

下記のイベントに参加します。義足の展示や、ルワンダ製品の販売を行う予定です。お近くのかた、是非お出かけください。お待ちしております！！

グローバルフェスタ JAPAN2007

10月6日(土曜日)・7日(日曜日)

時間：10:00～17:00

場所：日比谷公園(入場無料)

ルワンダ大使館ブースの一部をお借りして
展示、販売等を行います。

公式HP↓

<http://www.gfjapan.com/2007>

横浜国際フェスティバル2007

10月27日(土曜日)・28日(日曜日)

時間：10:30～17:00

場所：パシフィコ横浜・展示Bホール(入場無料)

パネル展示・ルワンダ製品・ワンラブグッズ販売

公式HP↓

<http://yokohama-festa.org>

【おことわり】

- * 発送作業の都合上、振込用紙が必ず同封させていただきますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。
- * 当団体はご提供いただいた個人情報について、皆様からご同意を頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはありません。

書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させていただきます。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0054 茅ヶ崎市東海岸南6-6-69 TEL:080-6564-4448 FAX:0467-86-2092

e-mail: info@onelove-project.info(日本事務所) onelove@rwanda1.com(ルワンダ事務所)

郵便振替口座：00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信 35号 2007年9月

発行：ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info>

